

## 畑雜草の幼植物 (6) 夏生一年生イネ科

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター 浅井元朗

日本全国に畑地で代表的な夏生一年生イネ科草種として、ここではメヒシバ *Digitaria ciliaris*, オヒシバ *Eleusine indica*, イヌビエ *Echinochloa crus-galli* var. *crus-galli*, アキノエノコログサ *Setaria faberii* の4種を取り上げる。

メヒシバはおそらく日本の夏の畑で最も広く生育する草種である。オヒシバは本州以南に分布し、西日本では畑地にも生えるが、東日本では耕される土地に入りこむことは少ない。暖かい地方では株基部で越冬し、ほぼ周年生育するが、畑地では通常、一年生としてふるまう。水田では“ノビエ”と総称される野生ヒエ類のうち、畑地に生えるのはほぼイヌビエである。人里に生えるエノコログサ類のうち、アキノエノコログサは耕地や荒れ地に多く、畑地の害草となりやすい。エノコログサ *S. viridis* は主に路傍など裸地に生え、キンエノコロ *S. glauca* は畦畔や芝生など草地に多い。

メヒシバの第1葉は幅広の笹の葉型で、表面、縁に白毛が密生する（写真-1）。この特徴だけで、畑地であれば多くの場合、イネ科幼植物をメヒシバと識別できる。オヒシバ、イヌビエ、アキノエノコログサの葉身は無毛である。オヒシバの第1葉は広線形で、葉身は地面に対して平行である（写真-2）。これに対し、イヌビエ、アキノエノコログサの幼葉は垂直方向に伸び、先が曲がる。イヌビエの葉身は左右に開き、先端が尖る（写真-3）。アキノエノコログサの第1葉は長だ円形で先が尖る（写真-4）。

メヒシバの幼植物は葉身裏面、葉鞘にも白毛が密生する（写真-5）。オヒシバの新葉は2つ折れで抽出し、葉身はほぼまっすぐに伸びる（写真-6）。この点で他の3種と識別できる。また、葉身は平行脈が目立つ。イヌビエは全体が無毛で、葉鞘は扁平となり、基部はしばしば赤みを帯びる（写真-7）。アキノエノコログサは葉の質が硬く、平行脈が密である（写真-8）。また、イヌビエに比べ、葉身が幅広い。写真-9は分蘖初期のメヒシバ（左）とオヒシバ（右）。メヒシバの葉身は柔らかで縁が波打つ。両種とも、裸地では地面に這うように分蘖を増やす。イヌビエの桿は扁平で直立し、左右に分蘖を広げ、葉身の先は垂れる（写真-10）。アキノエノコログサの桿は円形で、葉身の先は鋭く尖る（写真-11）。葉身の縁は著しくざらつく。メヒシバの成植物では葉身の毛は少なくなるが、基部に長い毛があり、葉舌は白い膜質である（写真-12）。オヒシバの成葉は基部にまばらに長い毛がある。葉舌はメヒシバ同様に膜質だが、短く目立たない（写真-13）。イヌビエは全体無毛で、葉舌はなく、葉身と葉鞘の境は白い（写真-14）。アキノエノコログサは葉鞘の縁に長毛が並び、葉舌は短い毛が並ぶ（写真-15）。

\*夏畑作の除草剤適用性試験では、ほとんどの場合メヒシバとイヌビエの2種に効果が確認されれば、使用基準の対象草種を「イネ科」と判定している。



写真-1 メヒシバの第1葉。写真-2 オヒシバの第1葉。写真-3 イヌビエ 1葉期。



写真-4 アキノエノコログサ 1葉期。写真-5 メヒシバ 3葉期。



写真-6 オヒシバ 3葉期。



写真-7 イヌビエ 3葉期。



写真-8 アキノエノコログサ 4葉期。



写真-9 メヒシバ(左)とオヒシバ(右)の幼植物。



写真-10 分蘖初期のイヌビエ。



写真-12 メヒシバ成葉の葉節部と葉舌。



写真-13 オヒシバ成葉の葉節部。



写真-11 分蘖初期のアキノエノコログサ。



写真-14 イヌビエ成葉の葉節部。

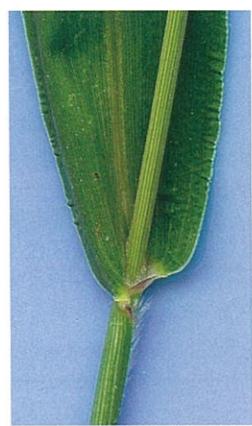


写真-15 アキノエノコログサ成葉の葉節部。